



日本統計学会 会報 2005. 1.25 No. 122

発行 日本統計学会
東京都港区南麻布4-6-7 統計数理研究所内
〒106-8569 Tel 03-3442-5801 Fax 03-3442-5924
編集責任 竹村彰通(理事長) / 佐藤整尚(庶務理事)
大屋幸輔(広報理事) / 栗原考次(広報理事)
振替口座 00190-2-61361
銀行口座 みずほ銀行広尾支店普通1092212番

JAPAN STATISTICAL SOCIETY NEWS

目次

1	巻頭随筆：「統計学との出会い」…鈴木雪夫… 1
2	2005年度統計関連学会連合大会の企画進行状況 ……………宮川雅巳… 3
3	第73回大会へのお誘い ……………大瀧 慈… 3
4	シリーズ：統計学の現状と今後 「統計学とマーケティング」 ……………照井伸彦… 4
5	官庁統計の民間開放に関する緊急アピールについて ……………藤越康祝・竹村彰通… 6
6	研究部会最終活動報告
6.1	多重比較とその関連分野の総合的研究 …………… 8
7	コンピュータの検索に上がってこない雑誌，

	コンピュータで検索できないアーカイブの論文は、 消滅する：日本学術会議の報告 ……柳川 堯… 9
8	韓国統計学会誌定期購読のお知らせ ……………10
9	修士論文・博士論文の紹介 ……………10
10	評議員会議事録 ……………10
10.1	2002・2003年度第5回評議員会議事録 ……………10
10.2	2004・2005年度第1回評議員会議事録(抄)…11
11	理事会議事録 ……………12
11.1	2002・2003年度第11回理事会議事録 ……………12
11.2	2002・2003年度第12回理事会議事録 ……………14
12	事務局から ……………15

日本統計学会会長選挙開票報告

本学会細則第4条による2005・2006年会長選挙の投票を12月15日で締め切り，12月20日に日本統計学会事務局において開票した結果，山本拓氏が当選しました。

2005・2006年会長選挙管理委員会
加藤 剛・山下智志

巻頭随筆

1 「統計学との出会い」

鈴木 雪夫(日本統計学会名誉会員)

本年の8月には，あの悲惨な大戦の終結から60年が経過したことになる。現在の統計学の理論は戦後から大いに発展してきたものである。したがって，1953年に大学を卒業した私は，統計学の理論の深化・発展，その応用の拡大・進展を目前にし，体験してきたといえよう。

私が統計学と出会ったのは，大学卒業の頃である。最近では，当時のことがしばしば思い起される。恩師，友人をはじめ多くの人との交わりが懐かし

く思い出される。その頃は，統計学の基本的な教科書はH. Cramér (1946) *Mathematical Methods of Statistics*であった。しかし，当時私はこの本をそれ程熱心には読まなかったと思う。学生時代から，私は統計数理研究所の松下嘉米男部長の主宰する研究会に参加することとなった。これは恩師である末綱恕一先生の紹介によるもので，この研究会で私は統計学に本格的に出会うこととなった。この研究会で，私が担当し報告したのは，まず，A.

Waldのドイツ語の原著論文「コレクティブ (Kollektiv) の無矛盾性」であり、ついで、やはりA. Waldの1950年出版の*Statistical Decision Functions* (統計的決定関数)であった。前者は、統計学にふさわしい確率を定義するためにR. von Misesにより導入されたコレクティブなるものの数学的存在を保証する前提条件を明示し、かつその無矛盾性を証明した論文である。その内容は極めて数学的である。確かに、歴史的には、コレクティブの概念は自然であり、また、それを統計学用の確率の基礎に適すると考えるのも自然であろう。その無矛盾性を論じたワルドは非常に優れた能力の持ち主であることは明らかである。

ワルドの「統計的決定関数」は、彼のそれまでの多くの研究成果の抽象化された統一的理論ともいべきものである。そこでは、ゲーム理論を統計学にとり入れて、統計学の新しい研究方向を示唆したのものである。当時としては、この本は数学的に高度の内容をもち、数理統計学の若手研究者にとって非常に魅力的であった。180頁の書物に過ぎないのであるが、理解するためには当時の現代数学の知識がかなり必要であった。不幸にして、ワルド夫妻は1950年にインド旅行の途中で航空機事故に遭遇し死亡された。誠に残念なことである。「統計的決定関数」の出版年が同年1950年であるので、この著書はワルドの遺書あるいは遺言ということとなった。この遺書には、統計学の研究方向あるいは理論的枠組みについて多くの示唆が含まれていると私は思ってきた。実際に、ワルドの理論の発展や理論の具体化が次々と発表されてきたのである。

前述のように、ワルドの本は余りに数学的であり、多くの人にとって近づき難い存在であることは否めない。幸いなことに、1954年にD. BlackwellとM.A. Girshickによる*Theory of Games and Statistical Decisions*が出版された。この本は、ワルドの本の優れた啓蒙書である。この本は、数学、統計学はもちろんのこと、経済学、経営科学、ORなどの分野の学生や研究者に広く愛読された

ものである。ブラックウェルとガーシックはそれぞれカリフォルニア大学(バークレイ)とスタンフォード大学の教授であった。

1960年頃には、ハーバード大学のビジネス・スクールで、統計的決定理論とか意思決定理論の教育・研究、とくに時代の要請に応じた事例研究が盛んとなり、教授達により、統計的決定理論、意思決定理論およびそれらの応用について優れた著作や教科書が刊行されている。そのうちで、私が愛読し、大学院の教科書に用いたのは、1961年出版のH. RaiffaとR. Schlaiferによる*Applied Statistical Decision Theory*である。この著作もワルドの遺書に導かれていると考えられるし、また、遺書の枠組みを新しく作り変え、進化させていると考えられる。この新しい枠組みでの名著を挙げておこう。(これらは今や古典というべきかもしれない。) M.H. DeGroot (1970) *Optimal Statistical Decisions*, McGraw-HillおよびG.E.P. Box and G.C. Tiao(1973) *Bayesian Inference in Statistical Analysis*, Addison-Wesleyである。

これまで述べてきたように、私の統計学との最初の本格的な出会いは、ワルドの統計的決定関数という極めて抽象性および一般性の高い統計理論であった。この出会いは、私の以後の理論的枠組みの形成に大きな影響を与えてきたのではないかと思う。

不慮の事故死により、1950年に、ワルドは自己の研究活動の終止を余儀無くされた。もし、彼が1960年まで存命であったとしたら、統計学の研究は格段に推進されたに違いなからう。現時点から見れば、ワルドの不在にもかかわらず、彼の遺書に含まれていた萌芽は、多くの後継者によって育まれ、時代の要請に応えうる理論体系へと成長を続けてきたと考えられると思う。最後に、理論の健全な成長が計算機の能力の向上によって支えられてきたことに注目し、両者の相乗効果により統計科学の有用性が益々発揮されることを期待する次第である。

2 2005年度統計関連学会連合大会の企画進行状況

2005年度連合大会企画委員会委員長
宮川 雅巳(東京工業大学)

2005年度統計関連学会連合大会は、日本統計学会、応用統計学会、日本計量生物学会の3学会の連合大会として、2005年9月12日(月)から15日(木)までの日程で、広島県広島市の広島プリンスホテルを会場として開催されます。昨年からこの連合大会用に開設されたWebページ

<http://www.ajss.gr.jp>

を介して、今回も会員とのコミュニケーションをはかりたいと考えております。

現在、企画委員会で検討している企画内容について紹介します。市民講演会は「原爆被爆者の健康実態に関する統計的考察；被爆後60年の経過(仮題)」のテーマで開催予定です。チュートリアルセッションは、企画委員会がテーマと講演者を選定して開催する予定です。コンペティションセッションは、参加資格、審査方法、開催時間帯などについて今後も十分に審議を重ねたうえで今回も実施する予定です。企画セッションについては、2003年、2004年に引き続いて公募することにしました。これについて次に述べます。

企画セッションは一般講演セッションでは達成できないプログラムとします。従来から一般講演セッションにおいても、関連した講演を集めてセッションを形成するように努めています。ですから、単にあるテーマに即した講演の集まりでは企画セッションとしては不十分です。毎年繰り返さ

れる惰性的テーマや同好会的セッションも不適切です。たとえば、現時点では国内での研究は少ないものの将来重要となるテーマを先行して取り上げるなど、一般講演とは一線を画した内容が求められます。なお、企画セッションにおいて、参加学会の独自色を出すことは一向に構いません。連合大会は参加各学会にとって年一度の貴重な年会です。

企画セッションの申込みに際しては、セッションのテーマとねらい、オーガナイザーの氏名・所属・連絡先、予定講演者と演題名、必要な時間(プログラム編成上、90分から120分の間にしてください)を2005年2月28日(月)17時までに

宮川雅巳 〒152-8552 目黒区大岡山2-12-1
東京工業大学 W9 - 50

miyakawa@me.titech.ac.jp

宛てに郵便もしくは電子メールでお知らせください。

一般講演の申込みは、2005年5月1日から6月13日(月)17時まで、本Webページで受け付ける予定です。締め切り後の申込みや演題変更は一切受け付けませんので、ご注意ください。

2005年4月初旬には具体的な企画や宿泊案内などを掲載する予定です。本大会が実りのある大会になるよう、皆様の積極的な参加をお願いいたします。

3 第73回大会へのお誘い(広島の町とプリンスホテル)

連合大会実行委員会委員長
大瀧 慈(広島大学)

2005年度統計関連学会連合大会(統計学会としては、第73回大会)が日本統計学会、応用統計学

会、日本計量生物学会の3学会の共催で2005年9月12日(月)~9月15日(木)の4日間に渡り、

広島市南区元宇品の広島プリンスホテルにて開催されます。私は同実行委員長の役をお引き受けした者です。本稿では現地情報として、とりあえず会場となる広島町の歴史および風土について、概要を紹介いたします。

広島町は、戦国大名の毛利輝元が今から約400年前の文禄2年（1593年）に太田川の河口に位置する最も広い島に築城を機に、その周りの三角州上に作り上げられた城下町として勃興されたとのことです。明治維新後太平洋戦争での敗戦までの期間には、一時期大本営や帝国議会が開かれるなど軍都として栄えるとともに、各種の商工業が成長しました。その後、同市街は、1945年8月6日、世界史上初の一発の原子爆弾により一瞬のうちに倒壊粉砕されるとともに、猛火に包まれ、爆心地から半径2キロメートル以内では大部分が焼失してしまいました。これまでの調査・研究により、人的被害として、被爆直後における死者・行方不明者は10数万人、その後放射線障害に苦しむことになった被爆者は更に10万人余に達することが明らかにされています。被爆直後は「原子爆弾による放射能に汚染され、広島は生物不毛の地となり、70年間、人間も住めない」という外国通信が伝えられていましたが、その後の復興は目覚ましく、現在は、日本屈指の造船業や自動車の生産拠点となるなど中四国地方最大の人口を持つ（2004年10月1日現在114万人）の政令指定都市として生まれ変わっています。

市内中心部には、国際平和のシンボルとして世

界遺産に登録されている原爆ドームを含む平和記念公園があります。その近傍は非業の死を遂げた被爆者の鎮魂の場として、また近年は人種や宗教を越えた世界平和の聖地として整備が行われており、四季を通じて各国から多くの観光客が訪れています。

会場の広島プリンスホテルは、市の最南端に位置する元宇品公園の一角にある大規模滞在型リゾートホテル（部屋数550室）で、潮騒と森林浴が同時に楽しめる静寂かつ風光明媚な環境にあります。JR広島駅からは電車/バスで30分の同ホテルの西側には公園を挟んで徒歩10分の所に広島港（旧宇品港）があり、宮島（世界遺産）や瀬戸内海の島嶼部（国立公園）さらには四国（道後温泉など）への南玄関として、観光ルートの拠点となっています。

広島は、三方を山に囲まれ南方に開いた三角州という立地環境により、市街地の橋下でも魚影が望める幾本もの清流と明るい波穏やかな海に恵まれ、更に都心から車で1時間以内の範囲に500m以上の海拔高度を持つ緑豊かなピークが30個以上も存在する、という世界的に例を見ない百万都市です。皆様には、当大会へ参加を機に、是非、その豊かな自然、海の幸、山の幸、銘酒を、そして人情をゆったりとご満喫ください。なお、同大会関連の各種現地情報に関しては、近日中にインターネットのホームページを開設してアップロードする予定ですので、その節は随時ご利用ください。

4 シリーズ：統計学の現状と今後 「統計学とマーケティング」

照井伸彦（東北大学大学院経済学研究科）

マーケティングは非常に幅広い領域であり研究のアプローチで見ても定義は千差万別であるが、「マーケティング」とは何かを理解する上でわかりやすいのは、自分がある新製品を作って販売しようとする状況を想定することである。まず市場

を構成する要素の1つである製品の視点からブランド間の競合状況を分析し（市場構造分析あるいは市場の規定）、他の市場構成要素である消費者の分析（消費者セグメンテーション）を通してニーズを把握し、製品計画を立て（製品デザイン）、

それを大量生産して市場展開する前に製品のテストをし（製品テスト）、さらに新製品であること
の特性から市場導入初期のプロモーションを考え
（市場導入）、販売を開始してからは、製品ライフ
サイクル（製品には人間と同じく寿命があり、導
入期、成長期、成熟期、衰退期などのライフス
テージが存在するという考え方）の各段階に応じた
マーケティング戦略を考える（ライフサイクル・
マネジメント）。これらの一連の考え方はプロダ
クト・マネジメントと呼ばれるが、それぞれのス
テップにおいて使われる（統計）モデルおよびデ
ータの種類を整理すると以下ようになる。

市場機会の発見

内容：市場の定義，市場細分化

手法：因子分析，多次元尺度法，クラスター分析，
決定木，CHAIDなど

データ：ブランド属性・評価データ，デモグラフ
ィックデータ，ブランドスイッチ・デ
ータなど

製品デザイン

内容：ポジショニング，コンセプトの需要予測，
初期の需要予測

手法：コンジョイント分析など

データ：選好（順序）データ

製品テスト

内容：テスト，新製品需要予測

手法：TRACKER，ASSESSORなど各種ORモデル

データ：模擬実験データ

市場導入， ライフサイクルマネジメント

内容：市場反応分析

手法：因果（エコノメトリック）モデル，時系列
モデル（集計データ），およびブランド選
択モデル（Logit，Probit）（非集計データ）
など

データ：POSデータ，消費者スキャン・パネル・
データ，広告シングルソース・データなど

マーケティングの諸問題をモデル化する上でと
くに関連の深い経済学あるいはその実証ツールと

しての計量経済学の枠組みとの比較の論点とし
て、経済学との大きな相違点のひとつは、経済学
が代表的消費者像の仮定の下で理論が組み立てら
れるのに対し、マーケティングではさらに現実に
近づけて、「消費者は異質である」という認識で
あり、その違いを把握して効率性を求めるのがマ
ーケティングの本質である。必然的に市場を細か
く見て消費者を細分化し、各セグメントの理解を
通してそれぞれに適当な戦略を提案してゆく。広
告などすべての消費者に一様にアプローチする考
え方のマス・マーケティングに対して、近年の情
報化に伴って消費者個人の購買履歴や属性データ
が入手可能になってくると、パネルデータを用い
てセグメンテーションと市場反応測定を同時に行う
ツールとして、まずいくつかの潜在クラスを仮定
した有限混合統計モデルが脚光を浴び、さらに連
続混合統計モデルの枠組みが開発されるにつれ、
まさにこの異質性を究極まで高めて一人一人の消
費者の嗜好や市場反応を捉えて効率よくマーケ
ティング戦略を考えるという、ターゲット・マーケ
ティングあるいはOne to Oneのマーケティングの
考え方が現在求められている大きな流れである。
しかし、個人の情報が入手可能となってきたとは
いえ、各個人別の情報量は安定的な統計的推測を
保証するほど多くはなく、そこで各消費者は異質
ではあるが共通する部分もあるはず、というロッ
ジックで、データの持つ情報を「異質性」と「共通
性」とにバランスよく分配し、異質性を推定する
のに不足する情報を共通性として消費者全体をプ
ールした情報で補うという、階層ベイズモデルが
マーケティングでは大変注目され一定の成果を収
めている。

POSデータや消費者スキャン・パネル・デー
タなど企業が有する情報は情報化の進展と共に急激
に増大しており、これらの大規模データからマネ
ジメントに有用な情報を取り出してマーケティング
の意思決定することが経営競争戦略上の急務と
され、他方、マーケティング研究および実務の世
界では、標本抽出法に代表される市場調査などの
これまでの統計学との古い関わり方をはるかに超

えて、多変量解析や時系列モデルの応用、MCMCを用いたベイズ統計分析が盛んに行われている。しかしながら、これまで統計学とマーケティングのコミュニティの結びつきは残念ながら薄く、これらの相互交流を促す目的で、科学研究費基盤研究（A）No.15200022（代表：和合肇名古屋大学教授）と統計数理研究所の共催の下、「マーケティングの統計的モデリングの新展開 - 潜在変数，潜在構造アプローチ - 」と題する国際会議を企画し、2004年12月1日 - 2日に統計数理研究所において開催した。そこではマーケティングにおけるオピニオンリーダー5人（Greg Allenbyオハイオ州立大学教授，Pradeep Chintaguntaシカゴ大学教授，Terry Elrodアルバタ大学教授，Peter Rossiシカゴ大学教授，Michel

Wedelミシガン大学教授）を招聘し、最新のマーケティングに関する問題と分析ツールに関する講演と活発な議論が行われた。そこではマーケティングにおいて統計学がいかに期待されているか、またどのような問題が統計学に求められているかを知る上で絶好の機会であった。企業が保有する統計情報は日々蓄積されており、これら大規模データからマネジメントのために有用な情報を抽出する統計手法の開発と応用は統計学にとってひとつの有望な発展領域であり、さらに売上・利益増大、シェア拡大など企業目的からして研究目標がわかりやすい分野でもあり、統計学がさらに積極的に関わっていくべき領域であろうと考えるところである。

5 官庁統計の民間開放に関する緊急アピールについて

日本統計学会会長 藤越康祝
日本統計学会理事長 竹村彰通

日本統計学会および応用統計学会は共同で以下のような官庁統計の民間開放に関する緊急アピールを2004年11月18日に発表しました。統計学会では11月13日の評議員会においてこの問題を検討しアピールの発表を決定しました。このアピールでは、内閣府の規制改革・民間開放推進会議における官庁統計の民間開放に関する議論について強い懸念を表明しています。またアピールとは別に、より詳しい申し入れ書を規制改革・民間開放推進会議議長宮内義彦氏宛に提出しました。

学会としてこのような形で意見を表明することは異例なことです。ここで経緯を簡単にご説明いたします。なお状況はまだ流動的で会報が皆様のお手もとに届く頃には状況が変化していることもあり得ます。詳しくは規制改革・民間開放推進会議のホームページ（<http://www.kisei-kaikaku.go.jp/>）をご覧ください。統計学会のホームページからもリンクしております。

内閣府の規制改革・民間開放推進会議は2004年4月に小泉首相の諮問によって設置され、国及び地方公共団体の事務及び事業を民間に開放する方策を検討してきました。この中で官庁統計がとりあげられ、国勢調査をはじめとする重要な統計調査の民間委託が検討されてきました。規制改革・民間開放推進会議の基本的な姿勢は民営化にあり、統計調査の持つ信頼性・正確性・連続性という観点を無視した性急な民営化が検討されていると懸念されます。日本統計学会のアピールはこのような懸念を表明したものです。日本の官庁統計および統計制度に今後改善すべき点が残されていることは当然であり、日本統計学会のアピールは現状をそのまま是認する立場のものではありません。

会員の皆様には今後とも官庁統計の民間開放の問題を注目していただくようお願いいたします。

緊急アピール

2004年11月18日

応用統計学会・日本統計学会

現在，規制改革・民間開放推進会議において，国勢調査をはじめとする重要な統計調査の民間委託が検討されている．もしこれらの重要統計が民間委託されれば，それらの信頼性・正確性が大きく損なわれることが予想される．基幹的な統計調査が信頼できないものとなれば，政府の政策策定全般において取り返しのつかない誤りをおかす危険性がある．また，これらの調査の正確性に依拠した学術研究は不可能となる．政府は自らの責任において，国勢調査をはじめとする重要な政府統計の信頼性・正確性・継続性を確保すべきである．

統計の信頼性・正確性の確保

これまで政府が実施してきた統計調査は国民の理解，協力を得て高い精度（信頼性と正確性）を維持してきた．この理由として，国及び地方自治体が公正，中立な立場から調査を行っていることに対する国民の信頼感，安心感が強かったことがあげられる．民間企業が統計調査を受託して行う場合，秘密性や守秘義務等の点で，調査の公正性，中立性に対する国民の理解に悪影響を与え，調査の精度を長期間に渡って低下させることになることが危惧される．民間開放することによって，統計の精度に影響を与えかねない環境を作るとは，厳に避けるべきである．

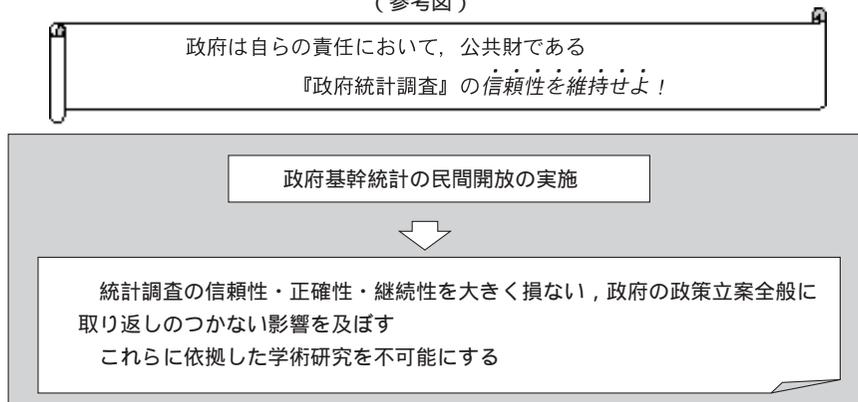
統計の継続性の確保

国勢調査など政府の重要統計が高い精度を継続的に確保するためには，その作成体制が持続的・安定的であることが不可欠である．市場化テストのための入札においては，民間企業が採算を度外視して受注する可能性を完全には否定できず，データの質の低下を来す恐れが多分にある．また，これまで整備されてきた国，地方公共団体の調査体制に代わり，市場化テストを実施した民間調査機関が異なる体制で調査をおこなった場合，重要な統計の継続性が損なわれる恐れがあり，行政や社会・経済へ甚大な影響を及ぼすことはもちろん，各種の研究活動にも支障を来す事態になり極めて問題である．

諸外国の経験に照らしても不適切

国の重要統計調査の実査を民間委託することについては，諸外国の経験に照らしても不適切である．特に，国勢調査（人口センサス）等の基幹的な大規模統計調査については，その客観性，中立性を確保する必要があることから，民間企業がその実査に関わる業務を受託している例は世界中どの国にも見当たらない．市場化テストの検討に当たっては，国際社会の中で我が国の統計の品質への信頼を傷つけることのないよう，外国の事例など十分な情報に基づいた慎重な検討が不可欠である．

（参考図）



☞ポイント①

統計の信頼性・正確性の確保

これまで、国や地方公共団体に対する国民の信頼感、安心感が強く、調査への協力度が高かったため、政府の統計調査は高い精度（信頼性と正確性）を維持。しかし、民間企業に統計調査を委託すれば、国民の理解、協力度に悪影響を与え、調査結果の精度低下の恐れ。

☞ポイント②

統計の継続性の確保

政府の重要統計が高い精度を継続的に確保するには、持続的・安定的な作成体制が不可欠。民間企業が従来と異なる体制で調査すれば、重要な統計の継続性が失われる恐れが大きい。

☞ポイント③

諸外国の経験に照らしても不適切

国勢調査(人口センサス)等の基幹的な大規模統計調査については、その客観性、中立性を確保する必要があることから、民間企業にその実地調査業務を委託している例は諸外国においても見当たらない。

6 研究部会最終活動報告

6.1 多重比較とその関連分野の総合的研究

主査：鎌倉 稔成（中央大学理工学部）

活動の概要

本研究部会では多重比較とその関連分野の総合的研究を主題として会合、および海外の研究者の来日に合わせてトピックス的に重要な問題を扱って議論を行った。

本年度は、前年度に引き続き多重比較および多重推測に関心を持つグループの研究発表会を通じて意見交換を行い、それぞれの立場から成果発表を目標として、研究水準の向上、促進、啓蒙活動を行った。大きな行事としては、以下のものがあげられる。

(1) 高麗大学Lee教授を招聘しての多変量解析の視野から眺めた、データベースにおけるデータ・マッチングの理論と応用

- (2) 「多変量統計モデリングとその周辺」に関するシンポジウム開催による、関連分野の研究者の研究交流
- (3) 第3回「西東京統計研究会」の開催および参加による、成果発表
- (4) 2004年度統計関連学会連合大会における、企画セッション「多重比較、多重決定方式とその関連分野」の企画、参加
- (5) テルアピブ大学Benjamini教授を招聘しての多重比較に関する、研究の発展の動向の調査および総合討論

成果

2年目はすでに経過報告に述べたように、多重比較の問題をやや間口を広げて、多重推測一般の研究者との交流も含めて研究を行った。高麗大学のLee教授やテルアピブ大学のBenjamini教授を招

いての多変量および多重比較に関する討論は非常に有意義であり、これらの講演会の参加者にとっては、多重比較関連分野の領域にどのような進歩があり、また、今後の研究の展開が見え大いに

啓蒙になったと考えている。研究成果としては、1年目に行った研究をベースとして、上にあげたそれぞれのシンポジウムや研究会、学会で会員の相互の意見交流を含めて研究発表を行った。

7 コンピュータの検索に上がってこない雑誌、 コンピュータで検索できないアーカイブの論文は、消滅する： 日本学術会議の報告

日本学術会議第4部会員

柳川 堯（久留米大学バイオ統計センター）

日本学術会議第4部は、今期、学術情報発信研究連絡委員会という名前の研連を発足させた。今回の日本学術会議報告は、まだ案の段階ではあるが、その研連報告案の紹介を行いたい。統計関連学会の今後のあり方にとって示唆に富む大変重要なことと思われるからである。

学術情報発信研連での主な結論はつぎの3点であった。

- (1) 学術情報発信の基盤は学会活動であるが、国際競争力のある学術誌の出版には学会の枠を超えた取り組みが必要である。ジャーナルの強化は、連携などによる学会活動と対をなすものである。
- (2) 電子ジャーナル発行やアーカイブ作成などの実施体制に、研究者が指導的立場で参加することが肝要である。また、現場の担当者が、学術情報発信のプロとして育成され、しかるべく処遇されることが必要である。
- (3) 目下、情報発信強化に向けて様々な動きが同時に進行しているが、これらの活動の連携を図る必要がある。学術会議として総合的にこの課題に取り組む体制を早急に設けることが望まれる。

第4部における議論の中で次のような国内の動きが明らかになった。物理学関係では、アメリカの一人勝ちに対抗してドイツ、フランス、イタリアが合同してヨーロッパ中心の電子ジャーナル発

行の構想がでていること、アジア地区からの電子ジャーナル発行が必要であると考えられること、国内物理関連3学会では共同で電子ジャーナル事業所を立ち上げ、情報発信をおこなっていること、化学関係では、J-STAGEを通じて国際ネットにのせ情報発信を行っていること。

また、議論の中で、次のような問題も指摘された。

- (i) 図書館に行かず、研究室でパソコンで論文検索する時代となった。特にアメリカはそうであり、日本でも若い世代はそうである。
- (ii) このような時代においては、コンピュータの検索に上がってこない雑誌に掲載された論文や、コンピュータ検索に上がってこないアーカイブの論文は、早晚消えてなくなることが予想される。もしそうになると、ゆゆしい知的財産の損失であるばかりでなく、過去の日本の研究が日本の若い研究者にさえ無視されるというゆゆしい事態が生じる。
- (iii) 電子ジャーナル発行はアーカイブ（バックナンバー）作成と一体でなければ意味が薄い。しかし、伝統がある雑誌にはバックナンバーが蓄積しており、アーカイブ作成はお金がかかり、弱小学会では出来にくい。電子ジャーナル発行やアーカイブ作成はこれまでボランティアにたよらざるを得なかったが独立行政法人化後は競争が激化しているためボランティアではできない。

(iv) 学問は、継承と発展という2面から支えられている。また、学問の多様性という面でも、一極集中してホットな話題ばかりを追うこと

は好ましくない。国家プロジェクトとして位置づけ、日本学術会議が主体的に方針を出すべきである。

8 韓国統計学会誌定期購読のお知らせ

日本統計学会と韓国統計学会は、お互いの欧文誌を特別価格(日本統計学会会員個人向2500円/年)で提供しております。国際交流にぜひ御利用ください。韓国統計学会誌(Journal of the Korean Statistical Society)は1年間で4号が発行され、1号あたり平均150ページというボリュームです。詳細は韓国統計学会ホームページ(<http://www.kss.or.kr/>)をご覧ください。

ご希望の方は、日本統計学会事務局まで氏名(または機関名)と郵送先をお送り下さい。折り返し振込用紙をお送りしますので、その振込用紙

の学会誌という項目に韓国とお書き加えの上、所定の金額をお振込みください。なお、図書館等の機関向けには13000円/年で提供させていただきます。

また、日本統計学会誌は、機関向けには9450円/年で提供していることも、合わせてお知らせさせていただきます。

韓国統計学会誌、日本統計学会誌とも機関向けにお申し込みいただきますと、事務局より請求書等の必要な書類をお送りさせていただきます。詳しくは事務局までへお問い合わせください。

9 修士論文・博士論文の紹介

修士論文・博士論文の紹介を、(1)氏名、(2)学位、(3)取得大学、(4)論文タイトル、(5)主査・指導教官等、の順で記載します。

博士論文

1 宇佐美嘉弘(専修大学経営学部助教授)、

(2) 博士(学術), 論文博士, (3) 東京大学大学院総合文化研究科, (4) Theory of Least Squares Estimators in Linear Regression with Covariance Structure, (5) 主査 廣松毅

10 評議員会議事録

10.1 2002・2003年度 第5回評議員会議事録

日時: 2004年9月3日 13:40~15:00

場所: 富士大学大会議室

出席者: 会長: 藤越康祝, 理事長: 国友直人
評議員: 岩崎学, 氏家勝巳, 景山三平, 勝浦正樹, 北川源四郎, 栗原考次, 西郷浩, 杉浦成昭, 田村義保, 垂水共之, 道家暎幸, 富澤貞男, 西井龍映, 大戸隆信, 藤井光昭, 舟岡史雄, 牧野都治, 南美穂子, 柳川堯, 美添泰人, 若木宏文, 渡辺美智子
(出席者数25名, 委任状13通)

冒頭, 会長より, 評議員会の成立が宣言され

た。

報告事項:

<議題1> 理事会からの報告

国友理事長より, この間, 理事会において検討された内容が紹介された。具体的は, 学会誌について, 和文誌を年2回刊行にしたこと, 韓国, 台湾等と海外との交流をしていること, ロゴを作成したことなどが報告された。

<議題2> 小川賞, 学会賞の報告

会長より, 各賞の受賞者が報告された。

<議題3> 統計教育委員会からの報告

渡辺美智子委員長より資料に基づき、この間の活動内容について詳細な報告があった。

審議事項：

<議題4>2003年度事業報告(案)と決算(案)について

南庶務会計理事より、2003年度決算(案)および事業報告(案)について説明があり、承認された。

<議題5>2004年度予算(案)について

佐藤庶務会計理事より、2004年度予算(案)および事業計画(案)について説明があり、承認された。

<議題6>73回大会について

理事長より、来年の大会については、連合大会として広島で行うことを連絡委員会に提案したことが報告され、このことを評議員会としても承認した。

<議題7>賞の創設について

会長から経緯の説明のあと、学会活動特別委員会の舟岡主査より、統計教育賞と統計活動賞の創設について資料に基づき説明があり、2つの賞の規程案および学会賞を含めた3つの賞に関する申し合わせ事項の提案があり、原案通り承認された。

<議題8>連合について

会長から資料に基づき、統計関連学会連合の規定案について説明があり、質疑討論の後、この規定案が承認された。

<議題9>総会の式次第について

会長から資料の基づき説明があり、承認された。

<議題10>入会希望者および退会者について

理事長から報告があり、了承された。

10.2 2004・2005年度 第1回評議員会議事録(抄)

日時：2004年9月4日(土)18:00~19:30

場所：富士大学6号館大会議室

出席者：藤越康祝会長、国友直人理事長(2002・2003年度理事会)、伊藤彰彦、稲葉弘道、岩崎学、大戸隆信、北川源四郎、木下宗七、栗原考次、小西貞則、佐藤整尚、杉浦成昭、杉山高一、高橋

一、竹村彰通、田中 豊、田村義保、垂水共之、道家暎幸、根本二郎、樋口知之、広津千尋、藤井光昭、前田忠彦、牧野都治、松原 望、丸山久美子、森棟公夫、矢島美寛、宿久 洋、山本 拓、渡辺美智子(以上32名)。(委任状6通。)

冒頭、藤越会長より定足数確認、開会宣言および挨拶があった。

報告事項：

<議題1>前評議員からの引き継ぎ事項

藤越会長より、前日(9月3日)に開催された2002・2003年度最終回の評議員会から、今期への申し送り事項となった事項4点について次の通り説明された。

- 学会賞の創設：日本統計学会統計活動賞と日本統計学会統計教育賞の創設が承認され、2005年から表彰を開始する。また日本統計学会研究業績賞については、日本統計学会賞および小川研究奨励賞との関係を明確化するなど新評議員会にて検討を続ける。
- 統計学関連学会連合：前評議員会にて参加が承認された。資料に基づき規定案が紹介された。同連合は、日本統計学会の他、応用統計学会、日本計量生物学会、日本計算機統計学会、日本行動計量学会、日本分類学会の計6学会での正式発足が見込まれる。今後の活動内容については全ての学会が関わる基本事業と、連合大会のような一部学会が関わる付加事業の両方が想定される。
- 評議員選挙の方法：現行の選挙規定では、同点者が多かった場合に当選者数が40名を大きく下回る可能性があることから、次回評議員選挙までに検討する。
- 「入会のお誘い」の改訂：文章を大幅に減らし、より読みやすくする。

審議事項：

<議題2>理事長の選出

会長の推薦により佐藤整尚、前田忠彦の両氏を選

挙管理委員に選出した。選挙方法の説明の後，出席評議員互選による選挙を行った。2回目の投票で過半数の得票を得た竹村彰通氏を新理事長に選出した。竹村評議員より受諾の意思表示および挨拶があった。

<議題3> 学会活動特別委員会，学会組織特別委員会の立ち上げ

藤越会長より，資料に基づき学会活動特別委員会，学会組織特別委員会の委員についての確認があり，若干の追加を経て，両委員会の発足を承認した。会長より各委員会の活動内容について説明があった。

<議題4> 学会活動特別委員会，学会組織特別委員会主査の選出

藤越会長より，両委員会の主査の選出について理事長選挙の手順に基づく各委員会メンバーによる互選とする旨の提案があり了承された。学会活動特別委員会は2回の投票で国友直人評議員が，学会組織特別委員会は1回の投票で垂水共之評議員がそれぞれ過半数を得て主査に選出された。

<議題5> 統計教育委員会の立ち上げ

藤越会長より，資料に基づき統計教育委員会の評議員委員に関する説明があり，若干のメンバー追加を経て発足を承認した。

<議題6> 統計教育委員会委員長の選出

評議員委員の互選により委員長を選出すると

の統計教育委員会運営規程に基づく投票の結果，1回の投票で渡辺美智子評議員が委員長に選出された。

<その他>

次回評議員会は11月13日に開催する。

[議事録参考資料]

2004・2005年度特別委員会

● 学会活動特別委員会

伊藤彰彦，稲葉弘道，岩崎学，北川源四郎，木下宗七，栗原考次，国友直人（主査），清水邦夫，杉山高一，田中豊，大戸隆信，樋口知之，広津千尋，松原望，丸山久美子，村上征勝，森棟公夫，宿久洋，山口和範，渡辺美智子

● 学会組織特別委員会

牛島賢二，高橋一，竹村彰通，田村義保，垂水共之（主査），根本二郎，福井武弘，道家映幸，牧野都治，矢島美寛，山本拓，渡辺則生

● 統計教育委員会（評議員委員）

伊藤彰彦，木下宗七，栗原考次，杉山高一，田中豊，垂水共之，大戸隆信，根本二郎，福井武弘，牧野都次，松原望，丸山久美子，村上征勝，宿久洋，山口和範，渡辺美智子（委員長）

11 理事会議事録

11.1 2002・2003年度 第11回理事会議事録

日時：平成16年5月22日（土）12：00～14：45

場所：統計数理研究所，会議室

出席者：藤越康祝会長，国友直人理事長，久保川達也，柴田里程，岩崎学，早川毅，宿久洋，大屋幸輔，中野純司，赤平昌文，竹村彰通，南美穂子，佐藤整尚

報告事項：

<議題1> 各理事からの報告

[欧文誌]

久保川担当理事より，今年は今までに24本の投稿があり，現在のところ，9本が採択され，23本が審査中であることが報告された。また，海外からの投稿は7本であった。投稿状況は，かなり活発であり，望ましい状態であることが報告された。

[和文誌]

加納担当理事の代理で久保川理事より，和文誌の表紙の変更を検討中であること，今年の第1号では保険の特集を企画，第2号では昨年

の学会賞受賞者による論文の掲載を予定していることが報告された。

【企画】

柴田担当理事より、今年度の連合大会について報告があった。まず、発表申し込みについて、締め切りのアナウンスをメーリングリストを通じて行う予定であることと、招待者向けの参加費免除について、申請を受付けていることが報告された。また、統研連と共催でシンポジウムを開催する予定であり、講演者を推薦してほしいという説明があった。展示については、ソフト会社にメリットがあるように変更を考えていること、展示会場にフリースペースを設ける予定なので、各大学や学会の宣伝をすることも可能であることが報告された。また、6月下旬にはプログラムを確定したいとのことであった。

【大会】

早川担当理事より、今度の連合大会の宿泊について、現段階で、700人強分が確保されていること、ポスターについては現在作成中であることが報告された。また、広告や展示についても現在交渉中であること、会場になる大学は朝の7時から夜の9時まで利用可能であることが説明された。

【広報】

宿久担当理事より、会報の119号が発行されたことが報告された。また、大屋担当理事より、学会のホームページについて、ロゴマークが決定したので、デザイン改定案が示された。国友理事長より、評議員選挙の締め切り等をお知らせするようお願いしたいという要請があった。

【渉外】

竹村担当理事より、連合大会に招待する件について、韓国からは2人來ることが決まり、カテゴリカルデータの企画セッションで講演してもらう予定であること、台湾から來る2人についてはテーマがばらばらなので、テーマに応じた企画セッションにいれる方向で考えていることが報告された。

【情報】

中野担当理事より、メーリングリストの更新が遅れがちなので、現在の体制を改善したいこと、また、そろそろサーバーマシンの更新時期になって

くるので、予算等、ご検討願いたいということが報告された。これに関して、理事の中からはレンタルサーバーを検討するのもいいかもしれないという意見が出された。

<議題2> 理事長からの報告

学会会議の法律改正に伴い、今後、学会と学会会議の関係がやや薄れてくるという発言があった。また、学会の倫理綱領についての調査がきているが、該当することはないと回答したという説明があった。統計関連学会の連合において事業広報小委員会が設置されその委員になったが、さらに小委員会の座長に選出されたことが報告された。

<議題3> 会長からの報告

統計関連学会の連合について、組織小委員会に出席したこと、この会の座長に選出されたことなど、一連の経過が説明された。また、この委員会では、連合の組織、および、連合規定、などが検討されていることが報告された。

<議題4> 後援・協賛について

国友理事長より、3件の後援依頼が来ており、承諾したことが報告された。

<議題5> その他

南庶務会計担当理事より、学生会員に問い合わせをし、学生の資格を失っている方には、正会員に変更してもらうように催促したこと、それに伴い、正会員が100名ほど増えたことが報告された。

審議事項：

<議題6> 予算について

南庶務会計担当理事より、2003年度決算案が示され、承認された。

また、佐藤庶務会計担当理事より、2004年度予算案の原案が示されて、説明を行った。

<議題7> 和文誌について

和文誌については年2回刊行予定であるが、本年度に関しては会誌の購読料は変更しないということで承認された。

<議題8> メールや郵便物の対応について

南庶務会計担当理事より、事務局宛に來るメールや郵便の仕分けに関しての方針を示され、承認さ

れた。

<議題9>入会者退会者の承認

資料が回覧され、入会退会者の承認がなされた。

<議題10>その他

次回の理事会は7月17日に開催される予定であることが表明された。

11.2 2002・2003年度第12回理事会議事録

日時：平成16年7月17日（土）12：00～15：30

場所：統計数理研究所 会議室

出席者：藤越康祝会長、国友直人理事長、久保川達也、加納悟、柴田里程、倉田博史、早川毅、大屋幸輔、中野純司、竹村彰通、瀬尾隆、南美穂子、佐藤整尚

報告事項：

<議題1>各理事からの報告

[欧文誌]

久保川担当理事より、34巻の第1号が刊行されたこと、投稿状況は今年に入って32本の投稿があり、例年より多いことなどが報告された。

[和文誌]

加納担当理事より、9月刊行予定の第1号の内容と第2号の方針について説明があった。また、現在、投稿数が減っているため、増えるように協力いただきたいとの発言があった。

[広報]

大屋担当理事より会報の内容やホームページの更新等について報告があった。

[情報]

中野担当理事より、メーリングリストに時々、ウイルスメールが流れることがあり、注意が必要であることなどが報告された。

[渉外]

竹村担当理事より、連合大会に韓国、台湾から講演者を招待する件について、各方面に手配をしていることなどが報告された。

[大会運営]

早川担当理事より9月の連合大会へ向けての準備状況が報告された。

[企画]

柴田担当理事より、今度の連合大会での発表申し込み件数が300弱にまで増えたことなどが報告された。

<議題2>評議員選挙結果について

南庶務担当理事より、評議員選挙の結果が報告された。また、会長より、評議員の当選者数の決め方について意見が出され、今後検討を行うこととなった。

<議題3>日本統計学会賞受賞者について

藤越会長より、選考の経緯が述べられたあと、受賞者が発表された。

<議題4>小川研究奨励賞受賞者について

久保川編集担当理事より、受賞者の報告があった。

<議題5>ロゴマークについて

瀬尾渉外担当理事より学会のロゴマーク入りの封筒について提案があり、白黒印刷の封筒を作ることになった。また、ロゴマーク入りのレター用紙についてはファイルから各自で印刷することになった。

審議事項：

<議題6>総会の式次第について

南庶務担当理事より、資料に基づき説明があり、了承された。なお、今のところ、名誉会員の推薦がないことも報告された。

<議題7>2003年度の事業報告案、2004年度の予算案と事業計画案について

南・佐藤庶務理事よりそれぞれ報告され、了承された。

<議題8>評議員会の議題について

南庶務担当理事より議題と会の進行について説明があり、了承された。

<議題9>統計関連学会連合の規定案について

藤越会長より連絡委員会での認められた連合の規定案について、経緯と内容について説明があり、この案について評議員会の了承をもとめることで承認された。

<議題10>賞の創設について

藤越会長より、活動賞規程案、研究業績賞規程案、統計教育賞規程案について説明があり、議論が行われた。その結果、学会賞との関連などについて、いくつか意見が出されたので、これを学会活動特別委員会に伝え、さらに、特別委員会の主査および、会長、理事長で意見の集約を図っていくということになった。

<議題11> 次期理事会への引継ぎ事項について

大屋広報担当理事よりホームページの管理について外注を検討してはどうかという提案があった。関連して、情報関連の引継ぎについても議論された。また、南庶務担当理事より、次期理事会では庶務担当理事を3人にしてはどうか、という提案があり、次期理事長に引き継ぐこととなった。

<議題12> 入会者退会者の承認

資料に基づき審議され、承認された。

12 事務局から

投稿のお願いとお知らせ

統計学の発展に資するもの、会員に有益であると考えられるものなどについて原稿をお送りください。新刊の紹介なども歓迎いたします。

来日統計学者の紹介につきましては、訪問者の略歴、滞在期間、滞在先、世話人などをお寄せ下さい。さらに、求人案内（教員公募）なども受け付けております。

できるだけe-mailによる投稿、もしくは、文書ファイル（テキスト形式）の送付をお願い致します。

原稿送付先

〒560-0043 豊中市待兼山町1-7

大阪大学大学院経済学研究科 大屋 幸輔 宛

Tel : 06-6850-5245 (ダイヤルイン)

Fax : 06-6850-5277

E-mail : kaiho@jss.gr.jp

(統計学会広報連絡用e-mailアドレス)

学会費自動払込の問合せ先

学会費自動払込問合せの旨とともに、氏名と住所を以下にお伝えください。手続きに必要な書類が送付されます。

〒107-0062 東京都港区南青山6-3-9

大和ビル内財団法人統計情報研究開発センター

日本統計学会係

TEL : 03-5467-0481, FAX : 03-5467-0482

E-mail : jstatoc@sinfonica.or.jp

訃報

次の方が逝去されました。謹んで追悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

松浦 和幸会員 (2004年9月11日)

退会者

吉崎正浩、岩田恒一、槇井剛志、浪花貞夫、松浦和幸、鈴木英明、泉省一郎

現在の会員数 (2005年1月7日現在)

名誉会員	25名
正会員	1446名
学生会員	74名
総計	1545名
賛助会員	17法人
団体会員	3団体

- ・統計学会ホームページURL :
<http://www.jss.gr.jp>
- ・統計関連学会ホームページURL :
<http://www.ajss.gr.jp>
- ・住所変更連絡用e-mailアドレス :
jusho@jss.gr.jp
- ・広報連絡用e-mailアドレス :
kaiho@jss.gr.jp
- ・その他連絡用e-mailアドレス :
jimu@jss.gr.jp

